

小檜山政克教授退任記念論文集の刊行にあたって

経済学部長 三好正己

小檜山政克先生のご退職にあたって、『立命館経済学』に記念論文集を特集し刊行することにいたしました。

小檜山先生は、1991年3月で、定年によって立命館大学教授の職を退かれます。先生は、1971年に立命館大学経済学部助教授として赴任されました。爾来20年にわたって、立命館大学および経済学部の発展のために、尽力されてきました。この間の先生の多大のご功績をたたえ、そのお人柄を敬愛し、ささやかながらここに記念論文集を編纂し、贈呈することにいたします。

小檜山先生は、1926年に東京にお生まれになり、長じて1948年東京商科大学予科をへて同大学本科にすすまれました。1951年ご卒業後世界経済研究所所員をへて1956年ソビエトに渡られ、モスクワ国際関係大学助教授、ソ連邦科学アカデミー世界経済国際関係研究所所員としてご活躍になりました。1963年にはモスクワ大学経済学部の大学院に進学され、経済学博士候補の学位を取得されています。帰国後法政大学などで非常勤講師をつとめられたあと、1971年に立命館大学に赴任されました。1972年に経済学部教授に昇任され、経済原論Ⅰ(マルクス主義経済学)の担当者として、研究、教育に従事されてきました。1988年4月から1989年8月までイギリスおよび東欧諸国、ソ連邦に留学され、研究交流されています。

小檜山先生のご研究は、マルクス主義経済理論の継承と発展のなかですすめられ、この間に多くの業績をあげられてきています。先生の業績を、ここで概略、紹介すると、はぼつぎの3つの領域に整理することが可能といえましょう。その一つの領域は、恐慌論研究であります。モスクワ大学での学位請求論文のテーマが、「第2次世界大戦後の資本主義の経済恐慌の特殊性」であったように、恐慌の問題は、先生の初発の研究テーマであります。この論文は、のちに

岩波書店から『戦後経済恐慌の性格』の書名で、翻訳出版されました。この分析では、第2次世界大戦後の経済恐慌の性格が、現実の展開を基礎に据えて特徴づけられるとともに、戦後における産業循環に10年周期がみられるとされています。その主張では、独占資本の運動法則を軸にすえ、独占資本の形成によって競争の形態が変化すること、恐慌時の国家の支出が恐慌を軽くすることが指摘されています。また、産業循環の各局面における独占資本の行動様式を固定資本と操業率、価格の関係をとおして明らかにされています。独占の生産制限による価格維持も恐慌の現れだという指摘は、その後の独占価格論への研究の展開につながっています。つぎの領域は、労働価値論から価格論にかんするものであります。市場価値論、利潤論から独占価格を解明されることによって、独占利潤の源泉を独占資本自らの部門内部に求め、そこから独占資本支配力の強弱を明らかにしようと考えられます。また、先生のご研究が、価値論を重視されていることは、サービス労働、商業労働と価値形成の業績にも示されていますが、そこでも今日の産業構成の変化、所得形成・配分という現実を目をむけられる研究態度が一貫しているものと知られます。最後の領域は、社会主義研究であります。所有概念の検討、計画経済と利潤方式についての研究はもとより、なによりも思想史として社会主義をとらえられようとしているところに、先生の並々ならぬ意志が秘められているようです。

小檜山先生は、国際性ゆたかな学識に根ざすスケールの大きな理論構成と、思想性で裏打ちされた学風、剛直にして細心な人柄で、教育のうえでも足跡を残されています。先生の教え子は、研究者をはじめ広範な領域で活躍していますし、その思想と学業とはなお多くの人たちに影響をあたえています。

また、先生は、立命館大学および経済学部の運営のうえでも、大きな貢献をされています。1981年10月から1983年3月まで経済学部長・経済学研究科長としての重責をはたされています。1985年4月から9月までのあいだ立命館大学国際交流委員会の委員長として、ゆたかな国際感覚を生かして立命館大学における今日の国際交流隆盛の基礎をきづきあげられています。そのほか大学協議員、学部主事など、立命館大学および経済学部の運営上で多くの足跡を残され

てきています。

社会主義諸国にみられる混乱と困難など、世界史上の新たな条件のもとで、経済学についての課題が累積し、経済理論の発展が要請されています。こうした課題にどのように対処すべきかを、また、これからの経済学部の在り方を考えなければならないときに、先生がご退職されることは、経済学部にとっては大きな損失であります。しかし、定年ということであれば、やむを得ないことでもあります。退職後も、経済学部にたいし、変わらぬご協力とご鞭撻をおねがいたします。

ご健康に気をつけられ、今後ともあらたなご活躍をつづけられますよう祈念いたしまして、送別の言葉とさせていただきます。

